1972年生まれの私の英語教育は中学から始まった。
中学1年当時の教科書　東京書籍株式会社　NEW HORIZON REVISED EDITION　English Course 1（1984年発行）の20ページ Lesson4 には、会話形式のセンテンスがあり、「Hi, Kumi.」「Hi, Mike.」とある。
教科書を読んで、リピートアフターミーの号令の元、マイクでもない私が「Hi, Kumi.」と呼びかけ、クミでもない誰かが「Hi, Mike.」と返す。

タムラサトル

2

タムラサトル略歴

1972年　栃木県生まれ
1995年　筑波大学 芸術専門学群 総合造形卒業
2011年　日本大学 芸術学部 デザイン学科 非常勤講師（現在に至る）
2024年　武蔵野美術大学 造形学部 彫刻学科 非常勤講師（現在に至る）

主な個展

2022年　「ワニがまわる タムラサトル」国立新美術館（東京）
　　「ワニがまわる理由は、聞かないでほしい」
　　MAKI Gallery / 表参道（東京）
　　「ワニがまわる理由は、聞かないでほしい」
　　TEZUKAYAMA GALLERY（大阪）
2021年　「TOKYO マシーン」銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM（東京）
2019年　「第14回 アーティスト・イン・スクール タムラサトル（現代美術家）×川口市立前川東小学校 6年生89人 成果発表展
　　〈われわれはワニを回す〉/ 講師作品展（川☆口マシーン）」
　　川口市立アートギャラリー・アトリア（埼玉）

主なグループ展

2023年　「ワニの90回目のバースデーパーティーへ行こう」
　　代官山 T-SITE GARDEN GALLERY（東京）
2022年　「キックオフ・プロジェクト成果展「1トンになる タムラサトル」」
　　栃木市立美術館（栃木）
　　「Enlightenment アートの光ー現代アーティストによる四つの光の空間」
　　鶴岡アートフォーラム（山形）
2021年　「Connect #1」MAKI GALLERY / 天王洲（東京）
　　「RE: FOCUS vol.5」TEZUKAYAMA GALLERY（大阪）
2020年　「春の雷 / Spring Lightning」nap gallery（東京）
2019年　「心ある機械たち again」BankART Station + BankART SILK（神奈川）
　　「岡本太郎美術館20周年記念展 これまでの企画展みんな見せます！
　　後期 / 芸術と社会・現代の作家たち 」川崎市岡本太郎美術館（神奈川）
　　「絵を見るとき、あなたは何を見ているの？」栃木県立美術館（栃木）
　　「SAPPORO YUKITERRACE 2019 ―雪と光のプロジェクト―
　　さっぽろユキテラス 2019」札幌市北 3 条広場 “カプラ”（北海道）

主な受賞歴

2022年　「第25回 みうらじゅん賞」
2017年　「INTERNATIONAL LIGHT ART AWARD 2017」First Prize 受賞
2015年　「LUMINE meets ART AWARD 2015」準グランプリ受賞
2010年　「小山市文化芸術振興活動事業助成金」平成22年度助成
2009年　「第12回 岡本太郎現代芸術賞展」特別賞
2002年　「PHILIP MORRIS K.K. ART AWARD 2002: THE FIRST MOVE」P.S.1 Art Award
1999年　「KIRIN CONTEMPORARY AWARD 1999」奨励賞

プラザノース開館15周年記念展　Domain of Art 32
Tamura Satoru Exhibition
タムラサトル Hi, Kumi. Hi, Mike.

会期　2024年2月24日(土)ー3月17日(日)
会場　さいたま市 プラザノース
　　ノースギャラリー 3〜7
主催　J&I 共同事業体
　　（さいたま市プラザノース指定管理者）
協力　埼玉県立新座総合技術高等学校

会場設営　TRNK
テキスト　井波吉太郎（アーツ前橋 学芸員）
撮影　金田幸三
デザイン　笹川アツコ
企画・編集　さいたま市 プラザノース
発行　さいたま市 プラザノース
　　〒331-0812 埼玉県さいたま市北区宮原町1-852-1

1
Hi, Kumi, Hi, Mike, #1　Maquette
2023年
アルミニウム、ピアノ線、他
114W × 18D × 12.5H cm

2
Hi, Kumi, Hi, Mike, #2
2024年
ベニヤ板、垂木、ウレタン塗料、鉄、他
2500W（可変）× 45D × 364H cm

3
Hi, Kumi, Hi, Mike, #3　Classroom
2024年
電子回路、配線、スイッチ、ベニヤ板、ウレタン塗料、鉄、他
200W × 200D × 250H cm（可変）

4
Hi, Kumi, Hi, Mike, #4　Drawing
2024年
ケント紙、鉛筆、コピック
A2（42H × 59.4W cm）40枚
埼玉県立新座総合技術高等学校ワークショップ作品、他

プラザノース開館15周年記念展　Domain of Art 32
Tamura Satoru Exhibition
タムラサトル Hi, Kumi. Hi, Mike.

「TMA・3」

映画・小説「2001: A Space Odyssey」の世界に登場するモノリスに付けられた名前、TMA (Tycho Magnetic Anomaly) に由来。

プラザノースギャラリーの天井を突き破らんとするスケールでそそり立つ、Hi, Kumi. と Hi, Mike.の文字。それを前にして、記憶の彼方にあった学生時代の勉強に対してのプレッシャーや英語へのコンプレックスを思い出し、しばらく立ちすくんでしまった。

“Hi, Jack. Hi, Mary.” これは中学１年生になった私が最初に教科書で触れたダイアログの冒頭である。be動詞の活用で早くも英文法につまずき、英語全体が苦手になってしまった私は、教員が読み上げる教科書のダイアログを復唱し、暗記を求められ、ひたすら音読をしなくてはならないことが苦痛で仕方がなかった。JackやMaryといった素性の知れない外国人キャラクターになりきり、壇上で音読発表会をしなければならなかったことも不条理であったし、知り合い同士の個人的な話題を尋ね合うといったオチのない中途半端なストーリーで、単純な定型表現を機械的に繰り返すことが、感情や感覚を不快にさせていったという負の記憶を呼び覚ましたのである。立体作品の横にある電子回路の作品《Hi, Kumi. Hi, Mike. #3 Classroom》がそれに拍車をかけた。40 個もの赤いボタンがずらりと並ぶ。恐る恐るボタンを押すと、Hi, Kumi !! Hi, Mike !! と読み上げる学生の声[1]が、様々なバリエーションで再生されていく。私は動揺する気持ちを抑えつつ、すべての声を何度も何度も聞き返した。

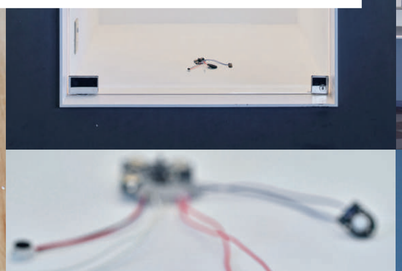
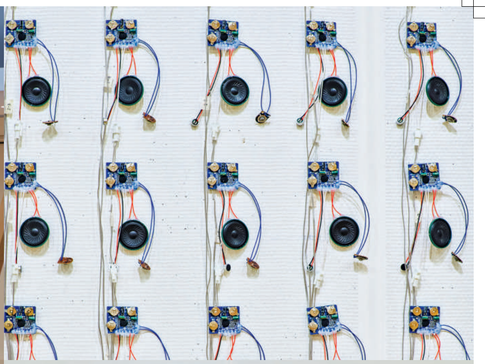
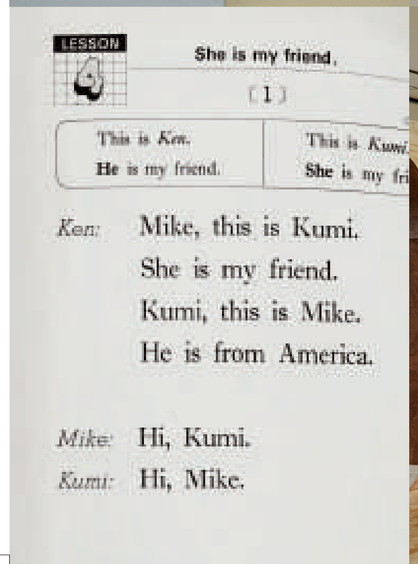
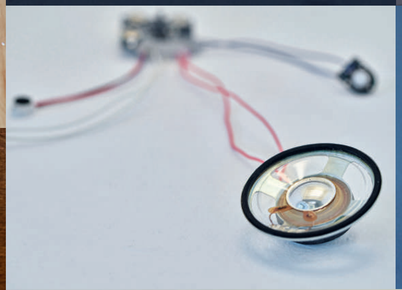
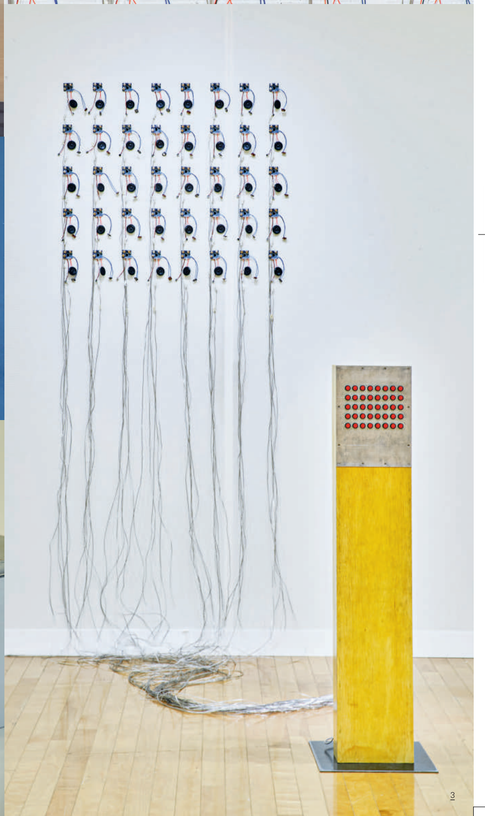
Hi !! Kumi. Hi, Mike ! ?　Hi～, Kumi Hi, Mike～

機械的に定型表現の音声が繰り返される。

だが、あの時とは違って、不思議と不快な気持ちにはならない。声の主のそれぞれが思い思いのキャラクター像を想像し、定型文の中にも自由な表現が満ち溢れていた。その元気な声によって、私の抱えていた心の闇は晴れ、徐々に冷静になっていったのであった。

タムラサトルは本作について、中学１年生の時の「よくわからない違和感」「ただただ気になる、頭の片隅に残ったあの言葉」を具現化したものとしか語っていない。しかし私の体験とタムラの体験がもしも一致するとするならば、その違和感やモチーフは「英語」にはなく、「目的の不明瞭な、単純で機械的な構造の定型表現の繰り返し」であるのではないかと推測する。それはタムラがこれまで生み出してきた作品とも合致する。《100 の白熱灯のための接点》(2001)、《Double Mountain》(2010-)、《愛マシーン》(2013) など、私が見てきたタムラの作品は、どれも電気的な装置とメカニカルなギミックを組み合わせ、周期的なアルゴリズムで動いていた。近年では、ポップでキッチュな大量のワニの造形物が無目的に回り続ける《スピンクロコダイル・ガーデン》(2009-) の大規模なインスタレーションを国立新美術館で実現したことが記憶に新しい。「『よくわからないが、なぜかワニがまわっている』という不可思議なこの状況こそが、作品の面白さの本質であることに気づいた」[2]とタムラは述べているが、その足元には無目的な機械による定型表現の繰り返しが埋め込まれていた。一方で、《Hi, Kumi. Hi, Mike.》の作品群は新たな表現への姿勢を見せている部分がある。展示の主役ともいえるベニヤ板と垂木で出来た巨大な文字の立体作品《Hi, Kumi. Hi, Mike. #2》はメカニカルなギミックを一切排除している。木目の表面も敢えて綺麗には仕上げず、わざと継ぎ接ぎにして処理しており、まるで記憶の断片をつなぎ合わせたかのような造形となった。アルミニウムで作られた《Hi, Kumi. Hi, Mike. #1 Maquette》と比較すると印象の違いは歴然で、素朴で柔らかなベニヤ板の質感の中で、言葉のもつ計測不能な重量感を暗に示す仕掛けに受け止められた。また電気とメカを使った唯一の作品である《Hi, Kumi. Hi, Mike. #3 Classroom》は、観客が作品に対して関心を示し、ボタンを押すという行為をしなければ音声は流れない。機械が自らの意思を持つかのように回る、光るといった一定のアルゴリズムで作動し続けるものとは違い、観る側の能動的な態度が必要となった。

これまでも感覚的な面白さの追求の中に、文字や数字記号といったコンセプチュアル・アートの片鱗を示してきたタムラであるが、意味も言語も記号も削ぎ落し、無目的を追求した表現のプラクティスの果てに行きつく先は…もしかすると可視聴域を超えた周波数を発する、巨大なモノリスなのかもしれない。

井波 吉太郎（アーツ前橋学芸員）

1 実はその中にはタムラが学生に扮した声がいくつか仕掛けられていることを後で知った。
2 国立新美術館「ワニがまわる　タムラサトル」(2022年) 展覧会ステートメント